

【実践報告】

「教職実践演習（中・高）」の報告

広島文教大学教育学部教育学科

教授 石原 義文

0 まえがき

教育実践演習は、教職課程の履修の全体を通じて身に付けるべき資質能力を最終的に形成し、その確認を行うための総合実践として位置付けられている。この演習では、「教員として求められる四つの事項として、①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項②社会性や対人関係能力に関する事項③幼児児童生徒理解に関する事項④教科等の指導力に関する事項について研修を深めることを目的としている。

学生は、将来、教員になる上で、自分の課題を自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。

1 本演習の方針

上記の目的を達成するために、演習（指導案の作成や模擬授業・場面指導の実施等）や事例研究、グループ討議等を適切に組み合わせて実施することや、教職経験者を含めた複数の教員の協力方式により実施している。教育の専門性に関する最新の知識技能の理解、生徒・保護者・教職理解、人間性及び教育の実践的指導力の涵養を、演習（ロールプレイを含む）、模擬授業などを通して実施する。

担当教員が中心となって授業は展開するが、専門性が問われる教科指導の部分に関しては、教科専門の教員の協力体制を組むほか、教育委員会や中学・高校教育の現場体験を持つ教員の協力体制を組む。国語科では、教育学部 岡・黒木・橋村・森教授、猪川准教授、英語科では、上利・石原・小西教授、ICT教育および学級経営では小川教職センター特任講師、保護者対応及び道徳教育では白石教授が担当した。特別支援教育については、外部講師に依頼した。

2 授業計画予定 通常は模擬授業教室

回	月 日 曜日	テーマおよび内容	担当教員
1	10/ 3 (火)	ガイダンス ・教職実践演習の意義、今後の日程、グループ分けなど	石原
2	10/10 (火)	特別支援教育Ⅰ～幼児と低学年児童の場合～ ・初等教育と合同で聴講 レポート提出	兼榊 (外部講師)
3	10/17 (火)	ICT教育のあり方（Ⅰ） ・ICT教育の理念、ICT教育を実りあるものにするための基礎的なスキル	小川
4	10/24 (火)	特別支援教育Ⅱ～高学年と中学生の場合～ ・初等教育と合同で聴講 レポート提出	兼榊 (外部講師)

5	10/28 (土)	学習上・生活上困難のある幼児，児童生徒の理解と支／授業実践報告からの学修（広島文教大学教育学会第37回研究大会に参加）	岡・石原
6	10/31 (火)	ICT教育のあり方（2） ・ICTを活用した授業案の発表	小川
7	11/ 7 (火)	国語科・英語科教育の実践的アプローチ（専攻別）（1） ・国語教育学・英語教育学の観点から	猪川・岡
8	11/14 (火)	国語科・英語科教育の実践的アプローチ（専攻別）（2） ・国文学・英文学の観点から	猪川・小西
9	11/21 (火)	国語科・英語科教育の実践的アプローチ（専攻別）（3） ・書写書道・英語学の観点から	森・上利
10	11/28 (火)	国語科・英語科教育の実践的アプローチ（専攻別）（4） ・国語学・英語教育学の観点から	橋村・黒木・石原
11	12/ 5 (火)	保護者との連携を目指して ・保護者対応，保護者との連携・協力のあり方を具体事例を通してのワークショップ	白石
12	12/12 (火)	授業観察実習（1） ・国語科代表グループによる模擬授業・批評会	猪川・石原
13	12/19 (火)	授業観察実習（2） ・英語科代表グループによる模擬授業・批評会	石原
14	1/ 9 (火)	道徳教育の理解 ・道徳の指導案を考える	白石
15	1/16 (火)	まとめ「私の目指すべき教師像」 ・これまでの学修を振り返って，自らの目指すべき教師像をまとめ，発表	石原

3 演習のねらいと実際

（1）ガイダンス 本演習の日程とその意義

教育実践演習は「教職課程の履修の全体を通じて身に付けるべき資質能力を最終的に形成し，その確認を行うための総合実践」として位置づけられる。この演習では，「教員として求められる四つの事項として，①使命感や責任感，教育的愛情等に関する事項②社会性や対人関係能力に関する事項③幼児児童生徒理解に関する事項④教科等の指導力に関する事項」について研修を深めることを目的とする。この目的を達成するために，「演習（指導案の作成や模擬授業・場面指導の実施等）や事例研究，グループ討議等を適切に組み合わせて実施することや，教職経験者を含めた複数の教員の協力方式により実施すること」などを説明した。

（2）特別支援教育

① 特別支援教育 I～幼児と低学年児童の場合～レポート提出

○学生のレポートより

支援が必要な生徒が同じ場で学ぶことを考えると，全生徒に多様性や共生することに対する理解を促す必要があると感じた。特別支援学校や特別支援学級に通わせるのか通常学級なのか，保護者の意図を尊重するようになったときに，特別支援教育を受けさせることに抵抗を感じる保護者もいると考える。

そのため，子どもたちの支援だけではなく，保護者の支援も同時に考えていくことが重要だと思う。

実際にデータを見ると，適切に支援を行うことで子どもたちの困難は改善することができるということが分かった。このようなことを保護者の方に伝えることで不安や抵抗は少なくなるのではないかと思った。

② 特別支援教育Ⅱ～高学年と中学生の場合～レポート提出

○学生のレポートより

講義を聞いて、印象に残ったことは、兼榊先生がおっしゃっていた、発達障害の子どもたちにとって、「驚き」は「怒り」になり得るということだ。感受性が豊かでこだわりが強いということは、安定性を求めているからであると講義で学び、不意の出来事が起こったときには不安な気持ちになることは誰もあると思うため、できるだけ細かく見通しを伝えていこうと感じた。4月から教員として学校で様々な子どもたちに出会うと思う。その時に、今日学んだことを踏まえて授業を行う際には、単元の計画や目標を導入部分で伝えることや、一日や一週間の予定を明確に伝えることを心掛け、どのような子どもたちにも安心して過ごしてもらえるような指導を積極的に行うことができるよう、努力していきたい。

(3) ICT教育のあり方

① 「ICT活用のメリットデメリット」

教育の情報化に関する手引き-追補版-(文部科学省2020年6月)では、教育の情報化について大きく四つの柱が示された。まず一つ目は子どもたちの情報活用能力の育成について。二つ目はプログラミング教育の推進について。三つ目は教科等の指導におけるICTの活用について。四つ目が校務の情報化の推進についてである。これらの柱をもとに、初等教育で学ぶ内容を確認し、中等教育におけるICT活用教育の実践例を学修した。子どもたちの情報活用能力を育成するには、教師自身の活用能力の向上が必要であることを理解し、卒業までの学修すべき内容について取り上げた。また、校務の情報化については具体的な演習を通して学修し、学校で扱う情報を保護するために、暗号化や情報セキュリティの重要性について、実践を通して学修した。

② 「オンライン授業」

当初3年間をかけて段階的に進める計画であったGIGAスクール構想が、整備計画を前倒して1年間で整備が進められた。これは、義務教育学校の児童生徒一人に一台の端末とネットワークを整備し、コロナ禍においても学びを継続させることを目的として進められた施策である。オンライン授業は、伝染性疾患の流行や災害時にも学びを継続できる利点があり、広く普及した。オンライン授業を実施する際の注意事項及び課題、必要なICT機器、その活用のための基本的なスキルについて学修した。具体的には、アカウントやドメインといったオンライン授業を運営する際に必要となる基礎的な知識を身に付け、オンライン授業の機能の一つであるフォームを使った実践例を体験し、その効果について実体験を通して学修した。また、スタディ・ログを用いた個別最適な学びの取組についても、実践例を通して学修した。

(4) 国語科・英語科の実践的アプローチ

これまでの専門科目における学修を振り返るとともに、今後の学修にどのような展望を持つべきか考える機会を持った。国語専攻者は国語学・国文学・書写書道・国語科教育学、英語専攻者は英語学・英文学・英語教育学の分野で実施した。

(5) 模擬授業

- ① 英語科 英語科は50分の模擬授業1回を代表の学生が担当した。高校1年生のコミュニケーションIで、生徒の活動を重視した授業を行なった。授業後に国語科の学生も含めて、全員で批評会を行なった。
- ② 国語科 国語科は50分の模擬授業1回を代表の学生が担当した。中学1年生の国語で、生徒の活動を重視した授業を行なった。授業後に国語科の学生も含めて、全員で批評会を行なった。

(6) 保護者・地域との連携を目指して

学校・家庭・地域連携の意義と方向性について考えた上で、保護者対応(クレーム対応)のロールプレイングを行って、保護者・地域対応について考えることをねらいとした。まず講義を行い、学校・保護者・地域は学校の目的達成、すなわち子どもの教育のために連携協働することを確認した。とくに、

近年のコミュニティスクールが教育課程の計画・実施にかかわった事例について動画を用いて理解し、連携協働の実際のあり方について検討した。続いて、保護者連携における教師の心構えとして、子どもにとっては保護者に対する「通訳」となり、保護者にとっては子育ての「パートナー」となることが必要であることを理解した。実際の対応には、カウンセリングマインドが必要であることを確認して、保護者からのクレーム場面を想定したロールプレイングを実施した。難しい保護者対応の場面を教師役・保護者役を疑似体験することによって、教師の仕事を務めるにあたっての心構えをつくるきっかけとした。

(7) 道徳教育の理解

道徳教育・道徳授業について、教材研究・授業方法・学習指導案を資料にして、事例的に学修した。

まず、中学校第1学年道徳科用教材「選手に選ばれて」（東京書籍）を用いて、教材研究や実際の学級運営上のよくあるトラブル、生徒の心情に関する広く深い理解が、授業展開に影響を及ぼすことを例示し、教材研究やその基礎となる生徒理解の重要性を確認した。次に、文部科学省「道徳教育アーカイブ」所収の中学校第2学年対象の道徳科授業の動画を用いて、パネルディスカッションの活動を取り入れた授業方法について、その可能性と限界・課題について考察した。動画視聴後、3～4人のグループをつくり、授業についての気づきをきっかけに互いに意見交換して、学びを深めた。

(8) 私の目指す教師像

ほとんどの学生が、4月より新任教諭として赴任する。不安と希望が入り混じった心境であることが想像される。新任教諭として無事にスタートを切るために必要な心構えおよび予備知識を共有した。

2年次での「学校教育の体験活動」で発表した「私の目指す教師像」を振り返り、4年間の学修を通して、それがどのように深化したかを省察する。学生には自らが目指す教師像を「私の目指す教師像」のテーマで互いに論議を重ね、それを踏まえて10年後の自分から今の自分への手紙という形式で、自己の姿を考えさせた。

○学生の手紙より（抜粋）

10年経って、私は中堅教師として新人教師の指導に携わっています。そして新しい効果的な授業方法を研究しているところです。（中略）あなたは教育実習にも行って授業規律の重要性や、生徒の褒めるべきところと、注意すべきところをきちんと言葉にしていくことの必要性を学んできていると思います。4年間の大学生活では具体的な教授法を学び、授業にどのように取り込めるかを考えてきました。その学びを元に保護者の方へ寄り沿って話を聴く姿勢を大切に信頼関係を築いています。

また、授業面では授業規律を大切にしながら、英語の苦手な生徒も好きな生徒も授業に参加したいと思ってもらえる授業作りをこれまで取り組んで来ました。（後略）

(9) 成果と課題

1年次「生徒の理解」、2年次「学校教育の体験活動」、3年次「教育実習Ⅳ」、4年次「教育実習Ⅴ・Ⅵ」が相互に関連付けられて教育的効果を発揮することができた。しかし、感染症の影響は大きく、学外での実習が制限される面もあった。

今後は教育成果をより精緻に検討して、4年間の学修がより緊密に関連付けられる仕組みを構築するために、より一層の努力が必要である。